

保温と換気に注意を

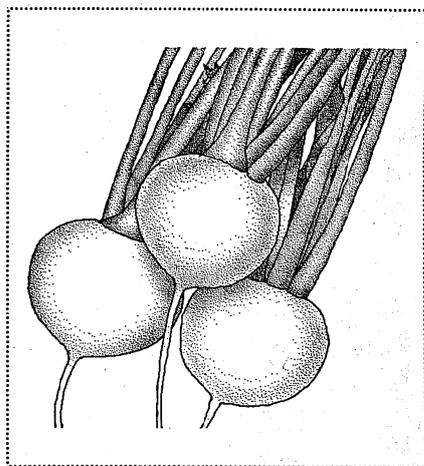
—— 鮫島 國親

春の七草として親しまれている「すずな」はカブの昔の呼び名です。最近では市販品種の栽培が多いですが、全国各地には今でも根の大きさ、形、肌の色など独特の品種が残っています。

根はち密で甘みがあり、茎や葉も柔らかく共に食べられます。根は消化を助ける働きをする成分を豊富に含んでおり、葉はカロテン、ビタミンC、鉄、カリウム、カルシウムなどを多く含んでいます。漬物として重宝されますが、煮物、酢の物、汁物などにも広く利用されます。今回は小カブの秋まき露地および秋-春まきトンネル栽培を紹介します。

発芽適温、生育適温ともに15-20度程度です。土壌はあまり選びませんが、有機質に富み、排水の良い弱酸性-中性の土壌が適しています。連作やアブラナ科野菜との組み合わせは避けましょう。秋まき露地栽培の種まき期は9月上旬-10月上旬ごろ、秋-春まきトンネル栽培の種まき期は10月-3月です。

本ぼには1平方メートル当たり苦土石灰100グラム、堆肥2キログラム、化学肥料70-100グラム(三要素15%の場合)を目安として施します。栽植密度はうね幅160センチ(床幅100センチ)、条間15センチ、六条で株間は間引き後12、13センチとなるようすじまき又は点まきします。種まき後、薄く覆土し軽く鎮圧します。土壌が乾燥している場合、十分かん水しましょう。



秋まきでは種まき後、害虫対策として1ミリ目合いの防虫ネットを張ると効果的です。種まきが10月中旬-11月上旬の場合は、生育途中の11月下旬ごろからトンネルによる保温が必要です。11月中旬まき以降は、種まき後直ちにトンネル被覆し、保温と換気(25度以上にしない)を行います。

冬まき(トンネル)は秋まきに比べて生育期間が長くなるので、緩効性の肥料を混用し、株間をやや広くします。収穫は根径5、6センチで、日中を避け適期に行いましょう。特に高温期は収穫適期の幅が狭いので遅れないようにしましょう。生育日数は秋まきで40-70日、冬春まき(トンネル)で60-100日程度です。

(鹿児島県農業開発総合センター副所長)

平成20年11月13日(木) / 南日本新聞

